最近おもうこと

Created by Wataru Nishino 06/11/06

景気拡大期戦後最長に！？

誠に勝手ながら都合により、2ヶ月ぶりの執筆となりました。11月3日に岸和田市のスポーツカーニバルというのがあり、私も地域を代表してリレーの選手として出場しました。このリレーは校区対抗で、全部で２４チームが出場し、予選で上位８チームが決勝に残ります。小学校１年からスタートし、６年年までと、中学生、社会人、高校生のアンカーへとつないで行き、延べ 1,100mを１２人で走ります。私は社会人代表で、日頃の運動不足もなんのその、チームプレーであるがゆえに一生懸命１００mを走り抜けました。残念ながら予選落ちしましたが、久しぶりにハラハラ・ワクワクし、達成感を味わいました。

あるチームの先頭ランナーが途中で靴が脱げて転んでしまい、しばらく立てないで泣いていましたが、なんとか立ち上がり、よたよたしながらも次のランナーにバトンを渡しました。前のランナーとは大きく引き離されたものの、あとの１１人は観客の拍手を受けながら最後まで全力で走り、無事ゴールインしましたが、先頭とは相当な開きです。チームプレーの怖さというものを痛切に感じたのと同時に、あの転んだ小学１年生の女の子の心のケア、大丈夫かなと少し気がかりです。

さて、「景気拡大期がいざなぎ景気を抜き戦後最長へ」、との報道が目立つようになりました。いざなぎ景気とは1965(昭和４０)年～1970(昭和４５)年の高度経済成長期において、57ヶ月間続いた大型景気で、長らく戦後最長でありました。しかし、今回の景気拡大期は2002年2月から始まり、この10月で57ヶ月目となって、ついにいざなぎ景気に並びました。11月の統計の発表はまだですが、最長を更新するのはほぼ確実視されています。

中小企業の経営者からは「どこが景気拡大やねん！」という声があちこちから聞こえてきそうです。実際私もそう感じます。第一、いざなぎ景気とは成長率が全く異なります。具体的には、経済活動が生み出す付加価値の合計であるＧＤＰ(国内総生産)の期間中(約5年間)の名目成長率は、いざなぎ景気では約１２３％と経済規模が約２．２倍になったのに対し、今回は約４％にとどまります。年率に換算すると当時のわずか５分の１の伸び率です。当時は、景気拡大とともにサラリーマンの賃金も上昇し、期間中で約2倍になりましたが、今回は期間中の賃金はむしろ下がっています。

現在の景気拡大は、少子高齢化と成熟した経済環境の中で、一部の大企業が中心となって、中国を中心とした対アジア向けの輸出の伸びがけん引きしているとのことです。従って、いざなぎ景気当時のように、国内の設備投資や個人消費市場が飛躍的に膨らみ、アメリカに次ぐ世界第二位の経済大国に躍り出た状況とは明らかに異なります。単に低成長が長く続いたというだけで、企業全体が底上げされるようなこともなく、決して家計が豊かになったとはいえない、そこが実感に乏しい大きな要因ではないでしょうか。

中小企業においては、製造業を中心としたごく一部は景気拡大の恩恵を受けているものの、小売業や飲食業、一部のサービス業などの個人消費関連企業は益々悪化しているように思います。これらの業種は、規制緩和や大規模店舗進出などの影響をもろに受けた、一番競争にさらされている業界でもあります。いたるところで見る、シャッターが閉まったままの店が多数ある商店街や、オープンして１年も続かない店舗などを見ると、かつてと異なる商売のむずかしさを感じます。

当時は、カラーテレビ、クーラー、自家用車の購入が３Ｃといわれ、ブームとなりました。一生懸命に働き、これらをいつか手にすることも目標の一つだったのかも知れません。これらは今やほとんどの家庭に、しかも複数存在します。凶悪な事件や自殺者の増加、ニート・フリーターの増加など、物があふれる現在において、夢や希望に満ち溢れていた当時と一番異なるのは、「心の貧しさ」ではないでしょうか。「ボロは着てても心は錦」という水前寺清子さんの歌ではありませんが、今の時代「心の豊かさ」が一番求められているのかも知れませんね。

2006年11月　西野　津